

展示室7

生を見つめて

2025年9月13日(土)～10月26日(日)

本展では、東京大空襲で亡くなった太田出身の福田元子による花鳥を細やかに描いた作品や、岡本彌壽子による未来あふれる女子学生への温かな思いを感じさせる作品などといった、命をみつめる作品を紹介しています。ほかにも、小谷津任牛は《花と少女》で、戦時中に亡くなった長女とされる可憐な少女と満開の夏椿(沙羅)、無数のオナガを装飾的に描き、静謐で物悲しくも美しい世界を作り上げました。内海加寿子の《雉子》は、切り花とともに横たわるキジに命の美しさと儚さをみせています。彼女はこの作品を制作した翌年に33歳の若さで亡くなりましたが、命への思いが伝わってくるようです。四方田草炎は、対象の本質へと迫るかのような粘り強く繰り返す筆致で、身近な動植物を描写しています。また、冒頭には木村三山による書の作品も展示しています。それぞれの表現に向き合ってください、その魅力をどうぞ堪能ください。

№	作者名	作品名	制作年	技法材質・形状	寸法(縦×横cm)	備考
1	木村三山	イシヨのてならい	昭和53(1978)年	紙本墨書淡彩・額装	61.9×92.7	木村幸子氏寄贈
2	木村三山	溶華 I	昭和59(1984)年	紙本墨書・軸装	110.3×69.1	
3	小谷津任牛	花と少女	昭和21(1946)年	紙本着色・幀装 (二曲一双屏風)	各171.0×164.0	田島健一氏寄贈
4	福田元子	木蓮	昭和12(1937)年頃	絹本着色・幀装 (四曲一隻屏風)	193.3×356.8	
5	福田元子	磯	昭和17(1942)年	絹本着色・額装	168.3×100.4	
6	福田元子	からたち	昭和11(1936)年	紙本淡彩、墨・額装	67.3×136.0	福田元子資料
7	福田元子	ウミネコ	昭和16(1941)年	紙本淡彩、墨・額装	62.0×133.2	福田元子資料
8	内海加寿子	雉子	昭和26(1951)年	紙本着色・額装	75.0×53.6	内海芳子氏寄贈
9	内海加寿子	鏡	昭和24(1949)年	紙本着色・額装	179.1×118.5	内海芳子氏寄贈
10	岡本彌壽子	陽が沈む	昭和57(1982)年	紙本着色・額装	130.3×162.1	作者寄贈
11	岡本彌壽子	吟	昭和58(1983)年	紙本着色・額装	178.3×93.6	作者寄贈
12	四方田草炎	野猿	昭和20-40年代	墨、鉛筆、淡彩、紙・額装	70.2×55.3	
13	四方田草炎	牡丹	昭和20-40年代	墨、鉛筆、紙・額装	132.3×123.8	
14	四方田草炎	梅の枝に鳥	昭和20-40年代	墨、鉛筆、淡彩、紙・額装	54.3×84.1	
15	四方田草炎	林檎	昭和20-40年代	鉛筆、紙・額装	56.4×69.0	四方田節子氏寄贈

* 作品保護のため、会場内の温度、湿度、および照度を調整して展示しています。また、都合により展示作品を変更する場合もございます。ご了承ください。

【次回予告】「上州の山を描く」 10月28日(火)～12月16日(火)

休館前の最後の常設展示は、群馬県の山を描いた作品を展示します。前橋出身の詩人、萩原朔太郎は、詩「帰郷」で、汽車の車窓から「まだ上州の山見えずや」と詠ったように、山は故郷を思い起こさせるものでもあります。描かれた山からどのような思いを読み取ることができるでしょうか。

群馬県立近代美術館